

【優秀論文】

「制服おしゃれ」と自己形成

～女子高生のプチ個性から探る～

3年6組15番 佐々木美空

I はじめに

一般に制服とは着用する人物の帰属先を表すものである。鷲田清一は仕事の際に身に着ける服などに関わらず、スカートも社会的記号を表す制服であるとして「スカートは女性の制服」¹だと表現した。しかし私たちが制服と言って真っ先に思い浮かべるのが学校制服（以下、「制服」と表記）だろう。最近では、女子生徒用のスラックスの導入に始まり、制服のユニセックス化も進んでいる。実際に、東京都中野区と世田谷区では「全ての区立中学校で、この春から女子生徒がスカート以外にスラックスの制服を選べるようになる」²り、この中央大学杉並高校（以下、「中杉」と表記）でも導入が決まっている。中杉では夏服が三種類、スクールセーター・サマーセーターの他にベストが二種類、バッグは通常のカバン型スクールバッグに加えスクールリュックも追加された。このように制服のバリエーションは増加し、多様化してきている。そこで女子高生達の関心を集めたのが制服をどう着るかということだ。制服の着こなしにも様々な選択肢が出てきたことで制服を着ながらも自己を表現することが可能となった。そこで女子高生達は制服の着こなしを通してどのように自己を演出しているのか。また、そこから女子高生達の自己形成がどのように変化していったのかを考察する。本論文では、まず女子高生にとって制服がどのような意味を持つのかを述べ（Ⅱ）、90年代の「制服おしゃれ」を取り上げる（Ⅲ）。それから90年代の「制服おしゃれ」と現代の「制服おしゃれ」を比較し（Ⅳ）、最後に「制服おしゃれ」の変遷から女子高生の自己形成の変化について考察していきたい（Ⅴ）。

Ⅱ 女子高生にとっての制服

ファッションデザインを研究している玉田真紀は、「自己を成長させるのに大切な青少年期において、外観は言葉による表現方法と同じように、自己を確認するための重要な手段」³であると述べている。不安定な時期である中高生にとって外観は自己を形成するうえで大きな役割を持つ。このような時期に多くの学生の外観に影響を及ぼしているのが制服である。多くの学生向け雑誌では制服特集も組まれ、制服を用いて自分を表現するということが盛んになっている。多くの女の子達に支持を受ける雑誌『Seventeen』には「今しか着られない制服コーデ」⁴やモデルの「高校生になって制服アレンジをするのも楽しみ。」⁵というような言葉が見られる。すなわち、高校生の期間にしか着ることができないという特別

¹ 鷲田清一(2007)『シリーズ・服と社会を考える 1 服と自分』岩崎書店 p.14

² 産経新聞社(2019)「女子中学生の「スラックス制服」23区で広がる 中野、世田谷は今春から全校」
(<https://www.sankei.com/life/news/190219/lif1902190041-n1.html> 2020年7月13日閲覧)

³ 玉田真紀(2002)「ファッションへの興味と自己形成」一般社団法人 日本デザイン学会『デザイン学研究特集号』9(4) p.39-46

⁴ 『Seventeen』5月号(2017)「新学期!!日本一カワイイJK宣言!!」集英社 p.23

⁵ 『Seventeen』5月号(2017)「JK1平手友梨奈ちゃんのこれ着たいっの春制服」集英社 p.118

感から、制服は高校生が自ら楽しむアイコンになったのである。

制服はその導入時から進化を続け、度重なるモデルチェンジにより多様性を持ち始めている。しかし、その一方で問題になっているのが女子高生達の制服の着崩しである。そこでこのような制服の着こなしを「制服おしゃれ」⁶と表現したのが女子高生事情について研究する山口晶子である。以前は個性を押し込めるものと見なされていた制服だが、今は世代と個人を演出するコスチュームに変貌しつつあるのだ⁷。このような制服の多様化が進んだことにより、女子高生のなかで制服がファッションツールとして注目されてきているのである。井上雅人はファッションについて以下のように説明する。

ファッションとは、衣服のことではない。それは、ひとつの考え方のことだ。あるいは、私たちの時代特有の、ユニークな世界観と言い換えてもいい。ファッションとは、ものの見方、あるいは、世界の捉え方なのだ。⁸

つまり、その時代、その人の姿はファッションに現れるということである。では、女子高生達はどのように「制服おしゃれ」を楽しんでいるのだろうか。加えて、「制服おしゃれ」に現れる女子高生達のアイデンティティとはどのようなものなのだろうか。各時代に愛読されていた雑誌の制服に関する記述から見ていきたい。

Ⅲ 雑誌『egg』に見るギャル文化

(1) 「コギャル」の誕生

1993年、渋谷から「コギャル」が誕生した。彼女達はミニスカートにルーズソックス(図1)、「茶髪」、「ガングロ」の「奇抜」なファッション⁹に身をつつみ、その新しい・自由なスタイルで注目を集めた。

図1 ルーズソックス



出典) 日本経済新聞 (2018)「女子高生にウケた「だらしない」靴下(平成のアルバム) ルーズソックス」(<https://www.nikkei.com/article/DGXMZ038825460S8A211C1000000/>)

⁶ 山口晶子(2007)「若者文化としての学校制服—女子高校生の「制服おしゃれ」に着目して」日本子ども社会学会『子ども社会研究』(13) p. 62-71

⁷ 東洋経済ONLINE(2017)「女子高生の「スカート」に映る不変のこだわり」(<https://toyokeizai.net/articles/-/200792>) 2020年8月29日閲覧

⁸ 井上雅人(2019)『ファッションの哲学』ミネルヴァ書房、p. i

⁹ 上間陽子(2002)「現代女子高校生のアイデンティティ形成」一般社団法人日本教育学会『教育学研究』69(3)p. 367-378

この頃は女子高生という「生き物」が論議的になっており、さらには「女子高生はそれ自体がブランド的な価値を持つ存在とな」¹⁰っていた時代だった。この現象について、NHK「ニッポン戦後サブカルチャー史」制作班は「制約の中でいかにして街を歩いてもかわいく見えるファッションを実現するかという、女子高生が差異と逸脱を求めながら流行を生む時代が訪れた」¹¹と語る。「女子高生ブランド」¹²とも呼ばれる特別な期間である高校生の時間をいかに過ごすかが問われる時期に、彼女たちは差異と逸脱を追及していったのだ。このような背景で「コギャル」は誕生した。

「コギャル」誕生の1993年から2年後の1995年にギャル系ファッション雑誌『egg』が創刊された。これは当時の高校生から絶大な支持を受け、その後のギャルカルチャーに大きな影響を与えたと言われる。両手を大きく広げて前に出す「egg ポーズ」と呼ばれる仕草は、写真撮影だけでなく、プリクラのポーズとしても流行した。このように特別な期間を過ごす高校生達にとって教科書的な役割を果たしていた『egg』だが、この雑誌のなかの女子高生達はどのように制服を着こなしているのだろうか。

『egg』に登場するのはみな肌は黒く日に焼け、あるいは黒く化粧を施しており、当時の「コギャル」を象徴するようなモデルたちだ（図2）。

図2 「コギャル」と呼ばれる女子高生



出典)『egg』第20号(1998)大洋図書

彼女たちを見てみると、制服の着こなしまでもギャルとしての型を保っている。それはルーズソックスであり、短く切ったスカートであり、スクールバッグにまでも現れている。「コギャル」登場からしばらくすると、歌手である安室奈美恵のファッションを真似る「アムラー」と呼ばれる若者も出てきた。「アムラー」という語は1996年の新語・流行語大賞トップテンにも選ばれている。この年のトップテンには他にも、「ルーズソックス」・「チョベリバ／チョベリグ」も選出されており、ここからもギャルカルチャーの広がりが窺えるだろう。しかしここで注目したいのは「アムラー」には条件があるということだ。ユーキャン新語・流行語大賞の説明には次のように書かれている。

¹⁰ NHK「ニッポン戦後サブカルチャー史」制作班(2017)「ニッポン女子高生史」宮沢章夫・大森望・泉麻人・輪島裕介・都築響一・さやわか『NHKニッポン戦後サブカルチャー史 深掘り進化論』NHK出版 p.46

¹¹ 5に同じ p.47

¹² 中村泰子(2004)『「ウチら」と「オソロ」の世代 東京・女子高生の素顔と行動』講談社文庫 p.82

スーパーアイドル安室奈美恵のファッションが大流行し、これをまねたギャルを「アムラー」と呼んだ。超ミニスカート、底の厚いブーツ、肩まで垂らす長い髪の三点セットが取りあえずの「アムラー」条件だそうで、街には“安室奈美恵もどき”が溢れた。¹³

「アムラー」と名乗るにはこれらの条件が必要であるという。当時の女子高生達は彼女達のカリスマ安室奈美恵になるために、これらの条件を満たす服装を追及していったのである。このように条件が提示されていることで皆が同じ服装をすることになり、そのおかげで「街には”安室奈美恵もどき”が溢れた」のだ。つまり、「アムラー」を目指す女子高生達は集団で同じ服装をするということに抵抗が無かったとも言える。

しかし、これはカリスマに対する憧れからくるものだけではない。『egg』を見ていくとこれは「コギャル」にも共通することのように思われる。彼女達は他人とかぶるということを嫌悪していないのだ。つけまつげで大きく見せた目、明るい髪色、短いスカート、クシュクシュとまとめたルーズソックス。『egg』に登場する女子高生達の外見もすべてこのようにひとまとめにできてしまうのではないだろうか。

(2) 就職氷河期と女子高生

「コギャル」が登場した1993年は、就職氷河期と呼ばれる就職難の時代だった。バブル崩壊で企業は採用どころか、リストラを余儀なくされ、新卒採用を凍結する企業が続出した¹⁴。リクルートワークス研究所によると、1986年から1991年までのバブル景気には求人総数・民間企業就職希望者数・求人倍率すべてが増加傾向にあり、1991年にはどちらもバブル最大となっている。しかしバブルが崩壊し、就職希望者数が増えていく一方、1996年には求人総数・求人倍率ともに1991年の2分の1近くになっている¹⁵。派手に遊んでいるようにも見えた高校生たちだが、実はこのような将来への不安と直面していたのだ。

そのような中で、就職難という将来への不安と戦う手段として高校生たちが選んだのが集団への逃避だった。その例として“ウチら”という三人称を挙げる。『egg』の企画名には“ウチら”という三人称が多用されている。例えば、2004年5月号の「ウチらのパッチャケおこづかい CH0♥」¹⁶。その4か月後には「ウチらのギラつき夏盛り MAX!」¹⁷などだ。また、『egg』と並んでギャルの教科書として愛読されていた『cawaii!』では「ウチらの御用達制服アイテム」¹⁸と題して特集も組まれている。この他にも多くの特集名に“ウチら”が使われているのだ。この三文字が当時のギャル雑誌、ひいてはギャルカルチャーを代表する言葉だったということが分かるだろう。

¹³ 自由国民社(1996)「『現代用語の基礎知識』選ユーキャン新語・流行語大賞」(<https://www.jiyu.co.jp/singo/> 2020年8月24日閲覧)

¹⁴ 中村昭典(2017)「若者たちのところに潜む不安の正体～なぜ彼らは小さくまとまるのか～」公益社団法人『都市住宅学』(99) p. 54-60

¹⁵ リクルートワークス研究所(2020)「第37回ワークス大卒求人倍率調査(2021年卒)」(www.works-i.com/surveys/adoption/graduate.html 2020年8月24日閲覧)

¹⁶ 『egg』5月号(2004)「ウチらのパッチャケおこづかい CH0♥」大洋図書、表紙

¹⁷ 『egg』9月号(2004)「ウチらのギラつき夏盛り MAX!」大洋図書、表紙

¹⁸ 『cawaii!』10月号(2004)「2004年秋 制服はこう着こなすべし! 図鑑」主婦の友社 p. 138

“ウチら”というのは“うち”という一人称を複数形にしたものだ。つまり自分を含むグループ・集団を表す。これについて斎藤知也は「「ウチら」と「ウチら以外」を隔てるある種の境界線がはっきりと存在しているようだ」¹⁹と言う。また、女子高生を中心としたマーケティングを展開する中村泰子は以下のように分析する。

女子高生は「人と同じじゃイヤ」という気持ちが強い。事実、新しいもの、人が持っていないものを求めます。

でも、その一方で、自分たちのグループを「ウチら」と呼び「オソロ」（お揃い）のものを持ちたがる。オピニオンリーダーの話すこと、持つものなどをメンバーで共有して「ウチらのマイブーム」ということによりこびを感じます。²⁰

女子高生にとって“ウチら”と“ウチら以外”という基準・境界が大事なのであると同時に、その中で同じものを共有しているという感覚を必要としているのだ。また、社会学者の宮台真司は「第四空間」²¹という概念を提唱した。「第四空間」とは家でも学校でも地域でもない新たな世界のことである。女子高生達は“ウチら”という共同体を形作ることによって「第四空間」への逃避を達成したのだ。

このような心理が“ウチら”には隠れている。就職氷河期という不安定な社会のなかで団結を求めた女子高生が行き着いたのが「ギャル」だった。かつての「竹の子族」と呼ばれる若者達は、おなじようなかっこうをしているというだけで、はじめてあう人とも、なにか意識をもち、連帯感ができた²²という。同じようにギャル達は、周りと同じ格好をし、同じ感覚を共有し、みんなとはしゃぐことで、難しいことを忘れ安心感を得ることができたのだ。不安からの逃避として彼女達は進んで“ウチら”へ属することを選択した。このようにして 90 年代の女子高生は自らのアイデンティティが自分の属する集団に依存する社会的アイデンティティを獲得していったのだ。

IV 現代の制服

（1）制服の多様化

Ⅲ章では 90 年代の「コギャル」について論じ、この世代の女子高生達は集団としてのアイデンティティを獲得していったことが分かった。しかし現在では、「コギャル」のように集団で同じ着こなしをしている女子高生はあまり見かけない。ではこのような着こなしの変化は何を表しているのだろうか。加えて現代の女子高生の自己形成はどのように変化していったのだろうか。

90 年代の女子高生の制服の着こなしはいわゆるギャルファッションに基づいたもので、ギャルの他にもツッパリ・ヤンキーなど、校則を無視した着こなしも目立った。しかし今ではそのようなファッションをしている女子高生はほとんど見られない。今の学生は学校の校則に対して比較的従順であるといえるだろう。これらについてトンボ学生服は「変形」

¹⁹ 斎藤知也(2001)「「ウチら」が外にひらかれていくとき：国語教育部会夏季研究集会に参加して」日本文学協会『日本文学』(12) p. 60-61

²⁰ 10 に同じ p. 15

²¹ 宮台真司(2000)『まぼろしの郊外 成熟社会を生きる若者たちの行方』朝日新聞社

²² 鷲田清一(2007)『シリーズ・服と社会を考える 2 服とコミュニケーション』岩崎書店 p. 19

→「着崩し」→「自分らしい多様な着こなし」へ」²³と時代によって制服の着こなしが変化していったと説明する。これによるとツッパリ・ヤンキーなどは「変形」、ギャルファッションは「着崩し」、現在の制服は「自分らしい多様な着こなし」にあたることを示す。では、現在の女子高生達の自分らしい多様な着こなしとはどのようなものだろうか。ティーン向け雑誌から考察していくことにしよう。

90年代に比べると制服のバリエーションは格段に増えたといえる。冒頭にも挙げたように、今では女子生徒の制服にスラックスを導入する学校もでてきた。またそれだけに留まらず、千葉県柏市の市立中学では「男子がスカートやリボンを選ぶこともでき」²⁴ようになった。このような変更の背景にあるのは性的少数者LGBTの人々への配慮や、「自由に選択できる制服を望む声」²⁵だ。今求められているのは自由に選択できる制服なのである。このニーズに応えるように私立学校を始めとして学校側は制服のモデルチェンジを進めた。その結果、制服のバリエーションは格段に増加したのである。この制服多様化の動きは制服アイテムを扱う販売店にも見られる。その一例として『cupop school』を挙げたい。

『cupop school』はスクールアイテムを扱っており、多くの学生の支持を受ける通販サイトである。従来の制服というとブレザーにワイシャツ・スカート・ネクタイなどがイメージとして挙げられるだろう。しかしこのカタログに掲載されているのはそれだけではない。カーディガンひとつとっても数種類がラインナップされており、その色も紫や黄、赤色など実にカラフルである。もちろんワイシャツやリボンも多種多様で、何通りものスタイリングを可能にする。また、『cupop school』のTwitter・Instagramを見てみると「#制服をもっと自由に私らしく」というフレーズが添えられており、2020年2月発行のカタログにも同じ文が印字されている。「制服をもっと自由にわたらしく」。このキャッチコピーが『cupop school』の目指す制服像を映し出していることは明らかだろう。また、同時にこれは現代の「制服おしゃれ」の根底にある考えを表しているものでもあるのだ。

次に、ティーン向け雑誌の制服特集を集め、その記述を見ていこう。すると、90年代のギャル雑誌には見られないある傾向が見つかった。それは、制服のコーディネートに「複数のパターンが存在している」²⁶ということだ。以下にその一例を挙げたい。「こなれシテイガール」「オトナメンズMIX」「プレッピーストリート」²⁷これらは全て雑誌『Seventeen』の制服特集に掲載されているコーディネートにつけられたキャッチコピーである。また、同じくティーン向け雑誌である『Popteen』では制服を使ったコーデバトルの企画が行われた。『Popteen』のモデルたちが組んだコーディネートには同じようにキャッチコピーがつけられている。「チャイボーグ風制服」「やんちゃカジュアル」「甘ギャル清楚コーデ」「マ

²³ PRTIMES(2018)「トンボ学生服が「各世代」に聞きました！制服は時代を映す鏡！？世代間の差に見る制服文化」
(<https://prtmes.jp/main/html/rd/p/000000004.000024412.html> 2020年8月25日閲覧)

²⁴ 日テレNEWS24(2019)「女子生徒に“スラックス”制服多様化のワケ」
(<https://www.news24.jp/articles/2019/03/20/07422932.html> 2020年10月1日閲覧)

²⁵ 朝日新聞DIGITAL(2018)「制服、性別関係なく選べます 千葉・柏の市立中学校」
(https://www.asahi.com/articles/ASL2F4GBKL2FUDCB013.html?iref=pc_ss_date 2020年10月1日閲覧)

²⁶ 4に同じ

²⁷ 『Seventeen』5月号(2019)「Seventeenモデル17人の新学期制服こーなります」集英社p.14

ニッシュ女子」²⁸（図3）。

図3 『Popteen』のモデルたちが組んだコーディネート



出典) CupopSchool (2020) <https://cupop.cecile.co.jp/special/popteen/>

若者文化について研究する山口晶子はこれらのコーディネートのパターンを以下のように分けた。

- (1) TPOに合わせる…どこに行く、何をするという目的や状況に合わせた演出
- (2) コンセプトに合わせる…先輩/後輩風、お嬢系/ギャル系といった演出
- (3) 自分の身体に合わせる…身長別など、一番似合っている自分を演出²⁹

以上のようにティーン向け雑誌では、制服も私服と同じようにパターン分けされて紹介されることが多い。これらのパターン、キャッチコピーは制服を着ていく場所・時・目的等に合わせて付けられている。もはや制服は学校内だけのものではないのである。つまり、複数のパターンが存在することで、様々な場面や状況に応じて、なりたい自分を演出することが可能になったのだ³⁰。

これらのキャッチコピーは制服が自らの帰属先を示すものであるというよりも、個々人が自己を演出するアイテムに変わったことを表す。“自分達”を守るための「制服おしゃれ」が“自分”を演出するためのツールとなったのである。すなわち現代の「制服おしゃれ」は集団ではなく個人単位で行われていると言えるだろう。制服アイテムの増加により、制

²⁸ CupopSchool (2020) (<https://cupop.cecile.co.jp/special/popteen/> 2020年8月28日閲覧)

²⁹ 4に同じ

³⁰ 4に同じ

服のコーディネートが広がったことで、女子高生達は次に、周りにいる他者との差異化を図っていったのだ。

（２）女子高生が求める「プチ個性」

現代の女子高生達の制服の着こなしが、90年代のそれよりも多様性を帯びており、個人としての制服コーディネートの幅が広がったことが分かった。しかしそれは、校則の範囲を極端に逸脱することも無く、ギャルとギャル以外というように、特に周りから突出しているという部分も見られない。共立女子短大の渡辺明日香はこれを「プチ個性」と表現した。マーケティングアナリストの原田曜平はこの「プチ個性」を以下のように分析する。

現代の若者は高価なものを所有し、わかりやすいアピールをすることにはあまり価値を置かない。それよりも大事なのは、横にそっと添えるように、さりげなく個性を出すことだ。

人と同じにはなりたくないが、さりげなく個性は出したい。(中略) 今どきの若者たちの間では、むしろこの「プチ」こそ大きな評価ポイントになっているようです。³¹

現代の女子高生は明らかな差異を社会全体にアピールするよりも、集団の中で目を凝らすことで浮かび上がるささやかな個性に重きを置いているのである。完全に集団から逸脱する訳でもなく、かといって周りとの同化を図っている訳でもないのだ。先に挙げた『Popteen』のコーデバトルでは、コーディネートを選ぶモデルが「わたしらしく」「わたしらしさをいれたくて」と発言する場面も見られた。このように、多様化した制服を利用し、「プチ個性」を取り入れることで女子高生達は「わたしらしさ」を表現するようになったのである。つまり、社会への反抗心から集団で行動することを選択したギャルとは対照に、現代の女子高生は集団内での「わたしらしさ」を重要視し、差異化を図っているのである。

現代の女子高生が個人個人での個性の演出に励むようになった理由の一つが、先に挙げたような制服の多様化によるコーディネートの広がりである。これによって規律に縛られない自分に合ったコーディネートが楽しめるようになった。しかし理由はそれだけではない。社会学者の古市憲寿は、現在の若者はコンサマトリー化していると論じた。コンサマトリーというのは「今、ここ」の身近な幸せを大事にする感性のことを言う³²。「コギャル」は社会という大きな世界を眺めていたからこそ、将来へ対する不安と対峙することとなった。しかし、「今、ここ」の身近な幸せを大事にする現在の若者は視野が自分の周りの小さな世界へと狭まってしまっているのである。

実際に、2016年以降、8四半期連続でプラス成長となっていた実質GDPが、9四半期ぶりのマイナス成長となった2018年³³だが、NHK放送文化研究所の「日本人の意識」

³¹ 東洋経済 ONLINE (2019) 「「プチ個性」を出したい若者たちの“一盛り”事情」
(<https://toyokeizai.net/articles/-/273795> 2020年8月28日閲覧)

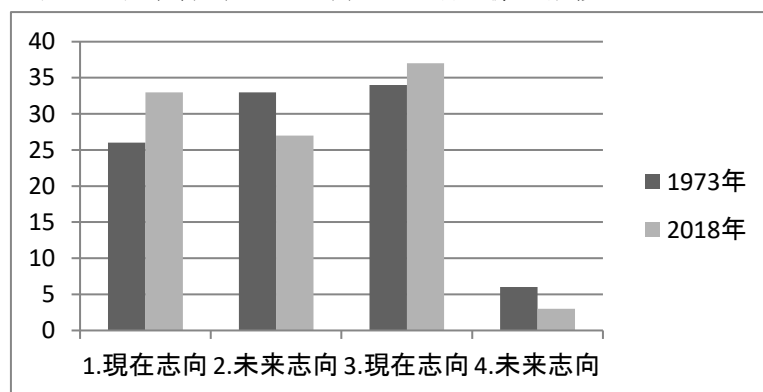
³² 古市憲寿 (2011) 『絶望の国の幸福な若者たち』講談社 pp. 104-105

³³ 厚生労働省 (2018) 「名目・実質GDPの推移」
(<https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/roudou/18/backdata/1-1-01.html> 2020年10月5日閲覧)

調査によると生活全体に対して満足していると答えた人は 38.7%³⁴と前回調査と比べて約 5%増加しているのである。すなわち、幸福である、自分の生活に満足しているかどうかは社会状況に依存しないのだ。

加えてもう一つ、人々の生活目標に関するデータを見ていきたい。「日本人の意識」調査では 1. その日その日を、楽しく過ごす・2. しっかりと計画をたてて、豊かな生活を築く・3. 身近な人たちと、なごやかな毎日を送る・4. みんなと力を合わせて、世の中をよくする³⁵という四項目を設定し、自分に最もあてはまるものを選んでもらうという形で生活目標に関する調査を行った。すると、若年層（16～29 歳）において、現在志向と位置づけられる 1 と 3 の項目は 1973 年に 26%と 34%だったものが 2018 年には 33%と 37%と共に増加している。一方、未来志向と位置づけられる 2 と 4 の項目は 33%と 6%から 27%と 3%³⁶とどちらも減少しているのである（図 4）。つまり、現代の若者は将来というよりも現在の幸福を重要視しているのだ。

図 4 若年層（16～29 歳）の生活目標の推移



出典)『現代日本人の意識構造』(2020) NHK出版

このように若者が現在志向になった要因として、学校教育の変化が関係していると述べたのが伊藤茂樹である。「個性尊重」や「生きる力」「ゆとり」など、抽象的で曖昧な現在の教育改革のスローガンが、生徒にやさしい学校、うるさく口出しをせず生徒のありのままを尊重する学校というような「学校のコンサマトリー化」をも助長しているのだ³⁷。また伊藤はこれについて以下のように補足した。

従来学校は生徒の「将来のため」というロジックで多くのことに介入して指導を行い、生徒を特定の方向に向けようとしていたが、現在は生徒個々人のありのままを尊重し、より現在志向（コンサマトリー）の強い「心地よい学校（＝居場所）」に変えていこうとしている。³⁸

³⁴ NHK放送文化研究所（2020）『現代日本人の意識構造』NHK出版 p. 付録 I 9

³⁵ 31 に同じ p. 203

³⁶ 31 に同じ p. 205

³⁷ 伊藤茂樹（2002）「青年文化と学校の 90 年代」日本教育社会学会『教育社会学研究』70(0) p 89-103

³⁸ 34 に同じ

つまり、教育する側である学校そのものが現在を重視するようになったのである。その結果として生徒の方が現在中心の考え方になるのは当然のことだと言えるだろう。そして「生徒個々人のありのままを尊重」するための方法の一つとして制服に目が付けられたのだ。

これら二つのデータから、現代の若者の世界に社会状況は関係ないということ、また現代の若者は未来ではなく現在を見ていることが読み取れる。言い換えると、社会に対する将来の不安を抱えていた「コギャル」とは違い、今の女子高生は社会を見ておらず、将来よりも現在に重きを置いているのである。

グループや仲間という概念は変わっていないものの、「コギャル」は社会との対比から“ウチら”を見出したのに対して、現代の女子高生は自分の周囲しか見えていないためにその中での自分探しに励むしかなかったのだ。そこから、一つの集団の中での個性を演出する「プチ個性」が求められるようになったのである。そのため、90年代の「コギャル」達が必要とした社会的アイデンティティは現代の女子高生にとっては、集団に埋もれ、個性を押し殺すことと同意である。現代の女子高生はそれをよしとしない。「わたしたちは「差異」と「同一性」の双方に敏感でなければならない」³⁹のである。そのような中で「プチ個性」を出すことが女子高生達の最大の関心事であり、アイデンティティなのだ。つまり、女子高生の自己形成は社会的アイデンティティの獲得から、集団の中であっても自分自身の個から自らを認識する、個人的アイデンティティの獲得へと移行したのだ。

V 集団から個人へ

時代が移り変わっていくと共にファッションも変化していく。井上雅人によるとこれは同時に人々の心の変化を表しているということになる。本論文では女子高生の「制服おしやれ」について論じていったが「制服おしやれ」と一口に言ってもその中身は全く別のもので、それを行う女子高生達も変化しているのである。90年代の女子高生達は社会を眺め、将来と真っ向から対峙していった。その結果、「コギャル」というかたちで自らを集団に委ねることで安心感を得るという道を選んだ。一方、現代の女子高生は社会ではなく、自分達だけの閉じこもった世界の中で生きている。そのため、同一集団の中で自分を表現するしかなくなったのである。しかし、完全な個性を出してしまうと集団から孤立してしまう。だからほどほどの調度いい自己演出の手段として女子高生達に「プチ個性」が選ばれたのだ。そうして現代の女子高生は、多種多様な制服を用いて自分の身近な周囲との差異化を図っていった。このようにして「制服おしやれ」は、女子高生の自己形成が社会的アイデンティティの形成から、個人的アイデンティティの形成へと変化していったことを表しているのだ。

(10848 文字 原稿用紙 27.1 枚相当)

³⁹ 19 に同じ p. 111

【参考文献及び関連URL】

- ◆井上雅人 (2019)『ファッションの哲学』ミネルヴァ書房
- ◆中村泰子(2004)『「ウチラ」と「オソロ」の世代 東京・女子高生の素顔と行動』講談社文庫
- ◆古市憲寿 (2011)『絶望の国の幸福な若者たち』講談社
- ◆宮台真司 (1994)『制服少女たちの選択』講談社
- ◆宮台真司 (2000)『まぼろしの郊外 成熟社会を生きる若者たちの行方』朝日新聞社
- ◆鷺田清一(2007)『シリーズ・服と社会を考える 1 服と自分』岩崎書店
- ◆鷺田清一(2007)『シリーズ・服と社会を考える 2 服とコミュニケーション』岩崎書店
- ◆NHK「ニッポン戦後サブカルチャー史」制作班 (2017)『NHKニッポン戦後サブカルチャー史深堀り進化論』NHK出版
- ◆NHK放送文化研究所 (2020)『現代日本人の意識構造』NHK出版
- ◆伊藤茂樹 (2002)「青年文化と学校の 90 年代」日本教育社会学会『教育社会学研究』70(0)
- ◆上間陽子(2002)「現代女子高校生のアイデンティティ形成」一般社団法人日本教育学会『教育学研究』69(3)
- ◆斎藤知也(2001)「「ウチラ」が外にひらかれていくとき：国語教育部会夏季研究集会に参加して」日本文学協会『日本文学』(12)
- ◆玉田真紀(2002)「ファッションへの興味と自己形成」一般社団法人 日本デザイン学会『デザイン学研究特集号』9(4)
- ◆『cawaii!』10月号(2004)主婦の友社
- ◆『egg』第20号(1998)大洋図書
- ◆『egg』5月号(2004)大洋図書
- ◆『egg』9月号(2004)大洋図書
- ◆『Seventeen』5月号(2017)集英社
- ◆『Seventeen』5月号(2019)集英社
- ◆中村昭典(2017)「若者たちのところに潜む不安の正体～なぜ彼らは小さくまとまるのか～」公益社団法人『都市住宅学』(99)
- ◆山口晶子(2007)「若者文化としての学校制服—女子高校生の「制服おしゃれ」に着目して」日本子ども社会学会『子ども社会研究』(13)
- ◆朝日新聞DIGITAL (2018)「制服、性別関係なく選べます 千葉・柏の市立中学校」(https://www.asahi.com/articles/ASL2F4GBKL2FUDCB013.html?iref=pc_ss_date)
- ◆厚生労働省 (2018)「名目・実質GDPの推移」(<https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/roudou/18/backdata/1-1-01.html>)
- ◆産経新聞社(2019)「女子中学生の「スラックス制服」23区で広がる 中野、世田谷は今春から全校」(<https://www.sankei.com/life/news/190219/lif1902190041-n1.html>)
- ◆自由国民社(1996)「「現代用語の基礎知識」選ユーキャン新語・流行語大賞」(<https://www.jiyu.co.jp/singo/>)
- ◆東洋経済ONLINE (2017)「女子高生の「スカート」に映る不変のこだわり」(<https://toyokeizai.net/articles/-/200792>)
- ◆東洋経済ONLINE (2019)「「プチ個性」を出したい若者たちの“一盛り”事情」(<https://toyokeizai.net/articles/-/273795>)
- ◆日テレNEWS24 (2019)「女子生徒に“スラックス”制服多様化のワケ」

(<https://www.news24.jp/articles/2019/03/20/07422932.html>)

- ◆日本経済新聞 (2018)「女子高生にウケた「だらしない」靴下 (平成のアルバム) ルーズソックス」(<https://www.nikkei.com/article/DGXMZ038825460S8A211C1000000/>)
- ◆リクルートワークス研究所(2020)「第 37 回ワークス大卒求人倍率調査(2021 年卒)」(www.works-i.com/surveys/adoption/graduate.html)
- ◆CupopSchool (2020) (<https://cupop.cecile.co.jp/special/popteen/>)
- ◆PRTIMES (2018)「トンボ学生服が「各世代」に聞きました！制服は時代を映す鏡！？世代間の差に見る制服文化」(<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000004.000024412.html>)